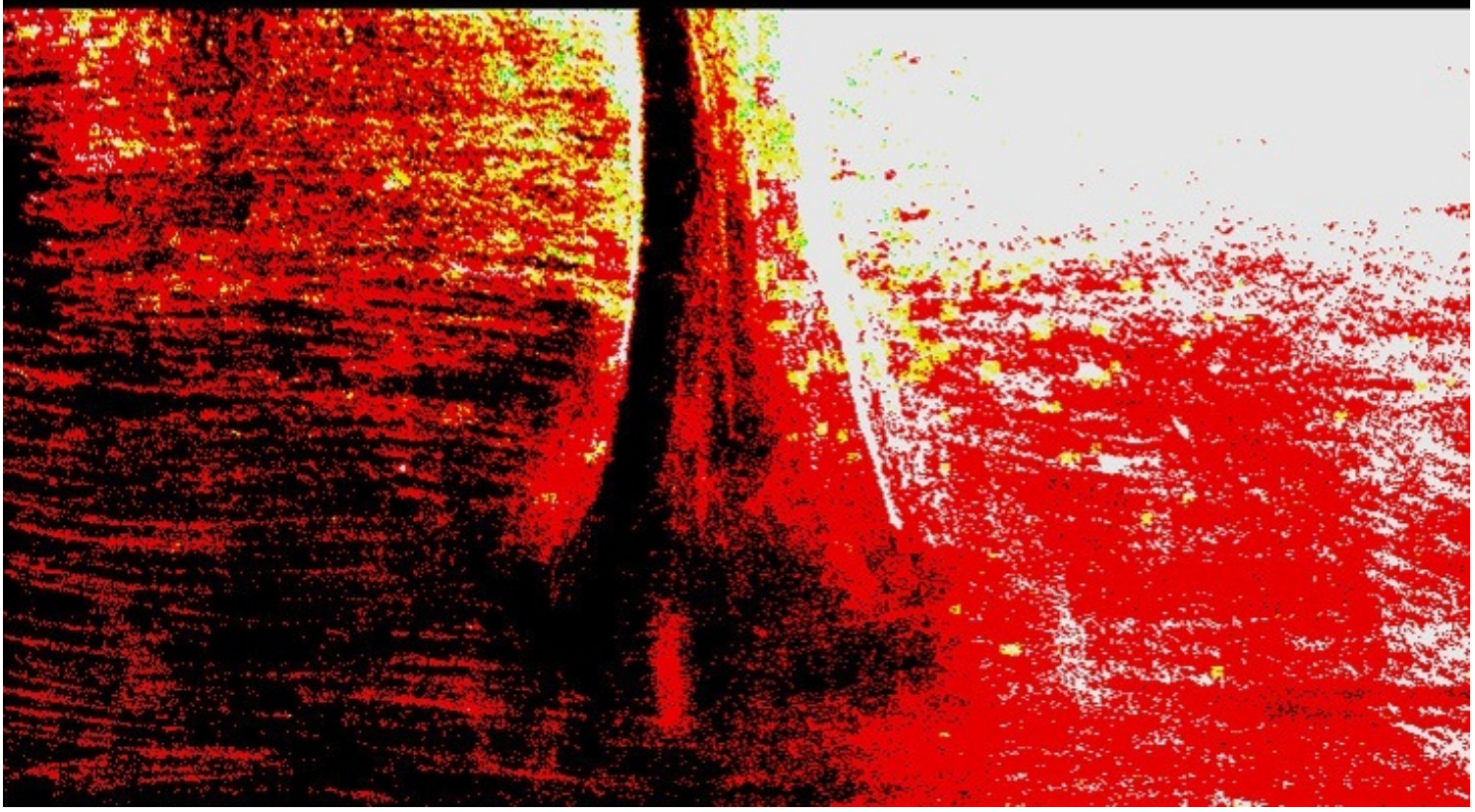
東雲八夫

平成ゆとり童話

長い、トンネル



ここは、トンネル。長い、トンネル。
僕は、歩き続けて、ここまで来た。
時々、横から連続する、爆裂音を聞いた。何の音か、知らない。長いトンネルを抜けると、世界が、ひろがっている。ずっと、言われ続けてきた。それなのに、誰からきいたのか、わからない。それなのに、僕は、それを疑わない。
疲れても、休めば、また歩ける。効果的に疲れをとる方法を知っている。ストレスに負けない方法を知っている。人に騙されない方法を知っている。
だって、トンネルのかべには、様々なはりがみがあるから。
少し、眠ろう。カフェインを取ってから、昼寝をすれば、夜、寝付けなくなることもなく、効果的に脳を休めることができるんだ。

目を覚ますと、派手なはりがみが視界に飛び込んできた。
トンネル延長のお知らせ。
みんな、同じ。
それなら、仕方がないか。

みんなが、迷わないように、立派なトンネルを作ってくれる人がいる。
それでも外の様子がわかるように、はりがみを貼ってくれる人がいる。
僕は、いろんな人に支えられてこのトンネルを歩いているんだ。ありがとうございます。
トンネルの中は、快適だな。きっと、外の世界より、快適なんだろうな。
外へ出る必要なんて、ないんじゃないのかな。
僕も、この快適なトンネルを、誰かに作ってあげたいな。
でも、そのためには、このトンネルを抜けなくちゃならない。
はりがみ。
トンネルを、走ってはいけません。
風。
はりがみが、なびいた。既に、少年は駆けていた。
少し、息が上がってきた。額の汗が、しずくとなり、宙を舞う。
遠くて、遠すぎて、少年には見えない。出入り口が、不意に塞がれた。そして、何も、見えなくなった。

巨大なクレーンの先端には、大きなフックが取り付けられている。
真ん中に引っかける。ドーナツ状の、それ。釣り上げた。[了]